

学校インターンシップの実態と効果に関する一考察

— 芦屋大学と地域の小学校を結ぶ取組を通して —

笠原清次
中村整七

1. はじめに

本学児童教育学科において小学校教員免許取得志望生が教育実習を経験すると、例外なく達成感・充実感を味わい小学校教員への志向性が高まる様子が見られる。一方、このような経験を持ちながらも実際に教員採用試験を受験し、教師となることについての迷いが消えず、中には4年次にまで持ち越す者もいることは初等教育コースの課題となっていた。

本コースの在學生に共通して、自身が過ごした小学校での担任との出会い、思い出深い体験が小学校教員になる動機付けとなっていることが確認されている。また、これまでは有志の學生が小学校でのスクールサポーター等のボランティア活動で、学校現場との接点を持っているに止まっていた。そこで、2017年度の試行を経て2018年度より、本学科の教育課程に学校ボランティアの授業科目を設置し、学修に取り組む体制をとることとなった。

インターンシップは、「學生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」（1995年その後一部改正 インターンシップの推進に当たっての基本的考え方 文部省¹⁾）と規定されている。その中で、参加學生が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択や高い職業意識の育成が図られること、就職後の職場への適応力や定着率の向上につながることを期待されている」とされており、平成27年度中に全国で参加した大学生63.2万人（22.5%）となっている。「養成と採用・研修との連携の円滑化について」（教育職員養成審議会第三次答申 1999年²⁾）の中で、教員を希望する學生が日常的に学校現場を体験できるような学校の受け入れ態勢を整備することが求められるようになった。また、「教育改革プログラム」（2011年 文部省³⁾）においては、インターンシップの有意義性とともに取り組む大学への財政支援と調査研究による充実、さらには學生の学校支援ボランティア活動の奨励がなされている。遡って、2007年では条件付き任用期間中に辞職する傾向の増加（2003年度111人、0.61%から2007年度301人、1.38%⁴⁾）が報告されており、教職への適応の課題が生まれていた。

さらに、大学における教員養成カリキュラムの改善の一つとして、「教育実習以外にも一定期間学校現場等での体験機会の充実を図る」（「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」2015年 中央教育審議会⁵⁾）とされた。続いて、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（2015年 中央教育審議会⁶⁾）において、教員養成に関する改革の具体的な方向性のなかで学校インターンシップの導入に関し、「學生が自らの教員としての適格性を把握するために有意義である」とし、「学校側においても学校の様々な活動を支援する地域人材の確保の観点から有益」として、双方のメリットを認めている。

このような教育行政サイドからの推進を受けて、多くの教員養成系大学・学部では、教職志望生に教育実習以外の一定期間学校現場での活動を体験させるプログラム（インターンシップ、ボランティア等の名称）を実施しているが、その実施形態は様々であり、数多くの実践報告や分析研究が蓄積されてきた。島根大学

(畑・森本 2005⁷⁾)や佛教大学(谷川 2009, 原 2009⁸⁾), 比治山大学(溝部ほか 2012, 2014⁹⁾), プール学院大学(村上, 八木, 山本¹⁰⁾), 九州女子大学(白瀬, 清田 2016¹¹⁾)等によるインターンシップの効果についての報告がある。いずれも学校現場におけるインターンシップによるポジティブな側面を追究した研究であり, このような活動の有効性が示唆されるものである。

そこで, 筆者らは本学が所在する芦屋市の公立小学校と結び, 学生が自ら教育現場での体験を積み, その実態を知りながら教職志望を熟考する機会を得るための具体的な方策について取り上げ考察することで, 今後の本学における教職志望生の進路形成に資するための有用な手がかりを得ることを目的とした。

2. 芦屋大学のキャリア教育・学校インターンシップ

芦屋大学では, 校訓「人それぞれ天職に生きる」に則り学校現場で教員として明日を担う人づくりに貢献することができるよう, これまで鋭意人材育成に尽力して来ている。創立者の福山重一氏は「人間は詳細に自己を分析し自己理解を図り, さらに仕事の内容と現代社会を分析して自己の向かうべき方向を模索し, そしてその方向において自ら経験してみることが求められる。次にこのようにして自己が決定した仕事に就いても, それが自己に適するか否か吟味する必要がある。ここで自己が納得すれば, さらに進んで生き甲斐を得ることができる。これよりして人間はそれぞれに天職を見つけ, その天職によって生きることが真の人權の確立となり, これが人間の最高の理想である」と考えた。そして, これらを「人それぞれに天職に生きる」という言葉で表現し, 本学の基本理念としたのである¹²⁾。本理念の下, 現在人間力育成を第一に考え, 学生の個性を生かし, 個々の能力を最大限に引き出すことを目標としている。

本学では学生がより円滑に4年間の高等教育学修をスタートし進路形成できるよう, 1年次に「キャリア基礎」(意思疎通・思考・討論・表現等の基本的スキルを獲得するための学修科目), 2年次に「キャリアデザイン」(1年次学修を基に, 自らのキャリア形成を図るために諸活動を行う学修科目)を設定している。

スクールサポーターや自然学校補助員等の学校ボランティア活動については, 学校現場体験の貴重な場であると捉え, 2回までは公認欠席扱いとし参加を奨励していることもあって, 多くの学生が経験している。臨床教育学部児童教育学科では, 前述のとおり教職を志望する学生が自らの進路形成決定時期が遅れ気味になる傾向があることから, 小学校教員免許取得を希望している学生に対して, 小学校現場で活動経験を積む学校インターンシップを2018年度から実施する体制をとり現在に至っている。

3. 学校インターンシップの実態

3・1 初年次の取組について(平成30年4月～9月)

本学と本学が所在する芦屋市との間で, 地域社会の発展に資することを目的としてスポーツ, 文化, 芸術, 地域人材の育成や教育の分野等で連携し協力するため, 「芦屋市・芦屋市教育委員会と学校法人芦屋学園・芦屋大学との包括的連携に関する協定書」(平成28年8月4日付け)が締結された。

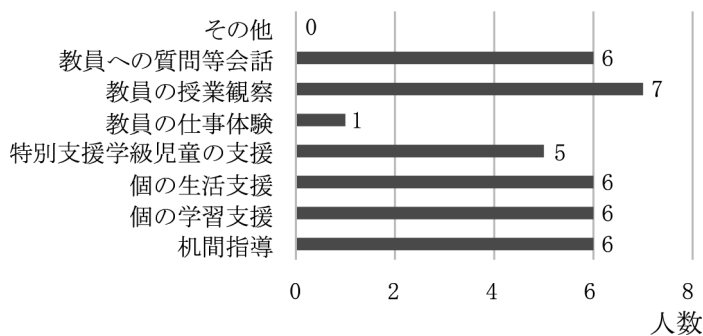
これを生かして, 児童教育学科教職課程に授業科目「学校インターンシップ」を設置し, 本事業実施要項を定めた。要項の中で, 教職を希望する学生が, 教育現場における教員の指導の様子を観察したり児童生徒の教育活動を補助する役割を体験したりすることにより, 自己の教職への適性をはかるとともに, 教職志望

を確かなものにし専門性を高める動機づけとするために実施する、とその目的を規定した。対象は教職課程を履修する2年生とし、活動内容として、教員の生活指導や授業を観察するとともに児童生徒の教育活動の支援に当たることとし、詳細については学生と受け入れ校が協議のうえ決定することと定めた。なお、実施に当たっては、学校インターンシップを希望する学生が希望書を大学に提出し、授業担当教員による面接を受け合格した者が行うものとした。大学は、芦屋市教育委員会宛てに学校インターンシップの派遣を依頼し受け入れ校を決定いただくこととなった。また、インターンシップ期間中は、参加生が活動日ごとに活動の記録をまとめて受け入れ校担当教員に報告し、活動を全て終えた後に大学に提出することとした。

実施に当たっては、大学での事前指導を3コマ設定し、インターンシップ期間中は、教育者としての自覚をもった言動をとること、服装や装飾品等については児童生徒や保護者、地域住民に不信感を抱かせるものであってはならないこと、活動期間中に知り得た児童生徒の個人情報その他秘密を他に漏らしてはならないことを踏まえ、学校における教員の一日の生活、教員が授業前や授業中に気を付けていることを理解させるとともに、個別指導の要点・要領をガイダンスした。さらに、各受け入れ校が公開している情報を閲覧させ、当該小学校の教育課程と地域の特色についてガイダンスした。また、交通費や本活動に係る経費は学生負担とすること、大学が指定する保険に加入することとし、受け入れ校がインターンシップ生として不適格であると判断した場合は、その活動を中止させることができることとした。受け入れ校において活動を行うにあたって、事前に学生が実施校に赴き、活動内容、担当の学年・学級等について受け入れ校教員と打ち合わせを行った。

本活動に参加した学生（以下、参加生）8名のうち、7名は5月・6月に週1回ずつ8回、1名は9月に連続して8回、いずれも8時30分から11時30分の計24時間の活動体験であった。普通学級（1～3年）における活動が5名、特別支援学級在籍児童への交流活動時の対応が3名（1～4年）であったが、それぞれの活動の内容は図1の通りであった。

図1 初年次インターンシップの活動内容



活動終了後の参加学生へのアンケートでは、「インターンシップを体験して良かったですか」（5件法）が、大変当てはまる（8人）、「今回の経験を通して教員志望の気持ちが強まりましたか」（5件法）が、大変当てはまる（3人）、当てはまる（3人）、少し当てはまる（1人）、無回答（1）であった。

活動内容については、「個の生活支援」、「個の学習支援」とともに、「教員への質問等会話」が6名で同一であった。普通学級児童、特別支援学級児童にかかわらず多くの時間をこの活動に割いたことと合わせ、主に支援が必要な児童へ対応が学校側から期待されていたことから、対応の仕方について担任に質問や確認をしていたことが日々の報告を通して明らかとなった。1名を除き、個の対応をしながら教員の授業観察を行っていた様子であるが、参加生にとっては教員の授業の進め方は興味深いものであったことが窺える。参加生が3年に進級した現在、教職希望を決定した者は8名中5名（以降A群という。）、2名は小学校教員免許を取得しないことを決め、1名は未定（左記3名は、以降B群という。）となっている。

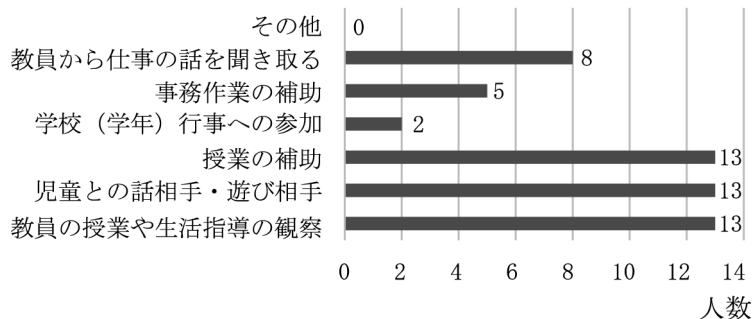
インターンシップ実施後の感想を見ると、『子どもたちといると自然と元気になり笑顔になっていた』な

ど、“子どもたちと過ごす良さを実感した”が、A群6件、B群2件、『いざ実際に自分がやってみると知識も全然ないのにどうしたらいいのか分からなくて不安しかありませんでした』など“子どもと接して考えさせられ、対応の難しさを実感した”が、A群3件、B群3件、『授業以外の時間や何気ない会話で子どもたちと接することがとても大切なことであると学んだ』など“子どもに対応し、子どもを指導する際に大切なことを実感した”が、A群3件、B群0件、『特別支援の先生や担任の先生がどのようにその子と接しているかを注目すると、その子の好きなことを授業内容と結び付けて少しでも授業に参加できるように工夫していた』など“教員の指導の仕方が勉強になった”が、A群2件、B群1件、『特別支援の先生もいるのですが、先生一人でクラス担任をするのはとても大変だなと感じました』など“教師の大変さを実感した”が、A群1件、B群0件、『学童保育のボランティアに参加して1～6年の子どもたちと触れ合い、どのようにすれば親密な関係を築くことができるか追究したい』など“教職に就くための自分の課題が見つかった”が、A群2件、B群1件であった。

3・2 2年次の取組について(令和元年4月～7月)

前年度末に小学校教員免許取得希望生13名全員が本活動の実施希望を提出したので、面接の上全員の参加決定をした。普通学級での実施を強く希望する学生に配慮し、芦屋市教育委員会を仲介して各自の活動実施校が決定され、5月から7月にかけて週1回ずつ8時30分から10時30分を10回、計20時間のインターンシップ活動を行った。

図2 2年次インターンシップの活動

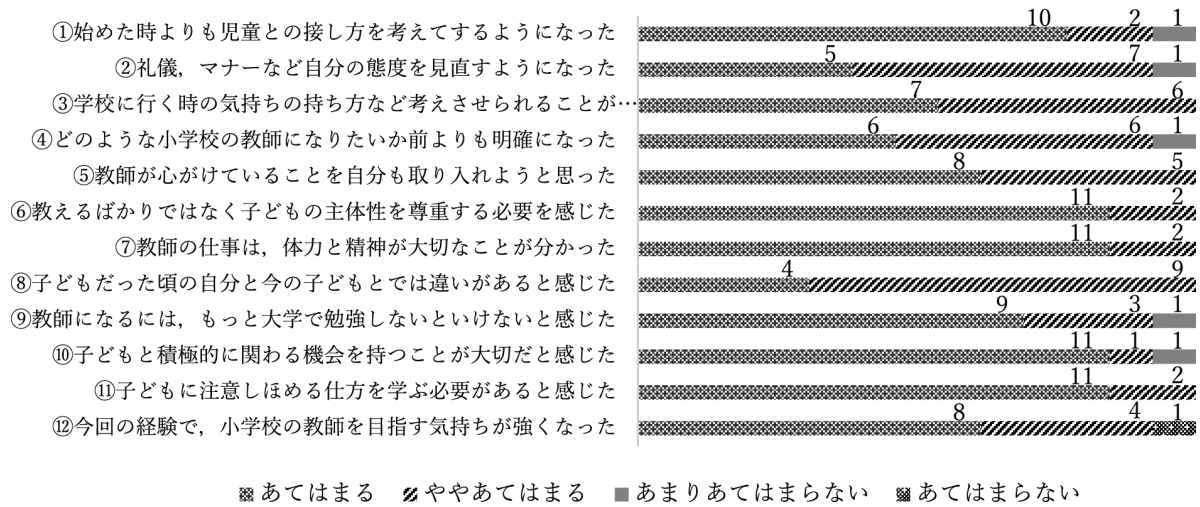


活動に入るにあたって、大学での事前指導2コマを行ったうえで、昨年度同様に参加生自ら(各校に1～2名)受け入れ校に出向き、事前の打合せを行った。普通学級(1, 3, 5年)における健常児への対応が7名、特別支援学級在籍児童への交流活動時の対応が6名(1～6年)であったが、それぞれの活動の内容は図2の

通りであった。

実施後のアンケートの中で、インターンシップを終えた今の気持ちを尋ねた(4件法)ところ、図3の通りであった。なお、①～⑪は、「学校インターンシップ カリキュラム開発プロジェクト」¹³⁾の質問項目から引用し、⑫は独自項目とした。

図3 インターンシップを終えた今の気持ち



質問⑫「今回の経験で、小学校の教師を目指す気持ちが強くなった」と質問①～⑪とをクロス集計したところ、質問①「始めた時よりも児童との接し方を考えてするようになった」($\chi^2=16.677$, $p<0.01$)、質問④「どのような小学校教師になりたいか前よりも明確になった」($\chi^2=17.714$, $p<0.01$)、質問⑨「教師になるには、もっと大学で勉強しないといけないと思った」($\chi^2=13.786$, $p<0.01$)、質問⑩「子どもと積極的に関わる機会をもつことが大切だと感じた」($\chi^2=14.100$, $p<0.01$)であり、それぞれ有意差が認められた。このことから、インターンシップ体験の中で、どのようなことが小学校教員への志向を促進するのかが窺える結果となった。

インターンシップ実施後の感想を見ると、『毎回子どもたちが出迎えてくれ仲良くなったので、注意もできたしほめることもできた』など“子どもたちと過ごす良さを実感した”が9件、『子どもの様子だけではなく保護者の様子も気にかけて観ていかなければいけないのだと思いました』など“子どもと接して考えさせられ、対応の難しさを実感した”が7件、『一人一人の性格や教え方が分かるのに時間はかかるが、そこを分かればものすごくやりやすい』など“子どもに対応し、子どもを指導する際に大切なことを実感した”が8件、『1年生といえど、精神的な成長はとても早い』など“子どもの成長を感じた”が3件、『先生はやはりその子の背景までしっかり考えられていて、このことが大切だと強く思いました』など“教員の指導の工夫が勉強になった”が9件、『毎日授業をしたり丸つけをしたり事務作業などとにかくすることが多いという印象でした』など“教員の大変さを実感した”が2件、『この期間ずっとお世話になった〇〇先生にはいろいろなことを体験させていただいたり、時にはこれは良かった、でもこれはだめとすぐに言ってもらえた』など“教員にアドバイスをしてもらえた”が6件、『勉強面だけではなく、児童の気持ち、心理面についてももっと考えて学ばなければならない』など“教職に就くための自分の課題が見つかった”が2件であった。

4. 考察

初年次の学校インターンシップ実施後の感想では、“子どもに対応し、子どもを指導する際に大切なことを実感した”でA群(3件)とB群(0件)の差異が認められた。これは、『何か楽しみながら授業を進めていく方がいいと学ぶことができたので、あとはどうわかりやすくできるかメリハリのあるものにできるようになりたい』『子どもたちとしっかりと向き合って多くの話をして、子どもたちとの時間を大切にできるようになったことが、授業中に分からないことを質問しやすい環境を生み出せるようになった』など、A群では、自分なりに子どもたちに対応したり指導したりした時のプラス体験が教職を目指す気持ちを促しているものと考えられる。

2年次の感想の中では、“子どもに対応し、子どもを指導する際に大切なことを実感した”が1年次より件数が多く見られ特徴的である。2年次実施後のアンケートのうち、子どもたちへの対応・指導時のプラス体験に対応する項目の中で、「①始めた時よりも児童との接し方を考えてするようになった」及び「⑩子どもと積極的にかかわる機会をもつことが大切だと感じた」とが「⑫今回の経験で、小学校の教師を目指す気持ちが強くなった」と有意差が認められたことから、参加生が自分なりに指導してみた時の子どもの様子からその良さを実感し、小学校教員への志向を高めたことが確認できると考える。

“教員の指導の仕方が勉強になった”は、1年次3件が2年次9件と増え、1年次にはなかった“教員にアドバイスももらえた”(『担任の先生に相談させていただいたところ、手助けをどこまでしたいのかすべきなのか、少し考えて来週聞かせて、と言ってくれた』、『時にはこれは良かった、でもこれはダメとすぐ言ってもらえて』など)が6件であった。学生と教員とがコミュニケーションしながら児童への対応と指導を行っていたことが窺える。

以上のことから、特に2年次では学生が与えられた環境の中で積極的に子どもたちへの対応と指導の経験を積む際に、教員の助言を受けながら取組を進めていたことが特徴的である。自ら指導者の立場に立ち、教員の指導の仕方とその工夫を意識して観察できるようになった学生が生まれたといえる。

学校インターンシップ担当教員は、初年次に参加生が取り組む様子と実施後のアンケートや感想を踏まえ、2年次の参加生に対し児童への対応の仕方の基本をより具体的に事前指導してきた。また、本取組が継続実施され、受け入れ校の教員が参加生の様子を見取った上で、子どもへの対応を任せたり指導する場面を設定したりするようになってきていた。さらに、担当教員や管理職が、学生と進んでコミュニケーションをとる機会が増えてきたことが顕著であった。受け入れ校教員の中には、インターンシップ期間中の多くの時間を担当し助言くださったり、合間を見て教職の喜びや業務についてお話くださったりするなど、学生に対する好意的な対応が目立つようになっていた。このように、参加生がインターンシップ体験を通して児童理解を伴った指導の大切さを実感したり、教員から教職者として大切にしていることについて機会をとらえて聞き取ったりした経験は、彼らに小学校教員を目指す気持ちを促していることが明確になったといえる。

5. まとめ

従来から本学学生が芦屋市立小・中学校現場に教育実習や学校ボランティアに赴くことはあったが、いずれも少数であり継続性が薄いものであった。学校インターンシップは、前述のとおり芦屋市と本学との間で結ばれた協定をもとに始まったものであり、今後教職を目指す学生たちがこれまでよりも多人数で継続していくことを前提としている。受け入れ校にとっても、支援が必要な児童への対応として学生ボランティアを受け入れる意思があるとして本事業が成り立っているものである。

前述したように、取組2年目を迎えて受け入れ校の教員側から学生への積極的な対応と教職志望生を育てようとする機運が生まれ、これが学生の学修意欲と結びつき、参加生の教職への志向を高める結果となって表れていると見て取れる。学校インターンシップ担当教員は芦屋市での教職勤務経験を有しているが、本事業を推進するに当たって、芦屋市教育委員会並びに芦屋市小学校長会に支援・協力いただき、期間中に学校を繰り返し巡回訪問して学生と学校現場をつないでいる。児童教育学科では、このように、“地の利”を生かした取組を通じて教職を志望する本学学生の進路形成に寄与する取組を進めている。

参考文献

- 1) 文部科学省・厚生労働省・経済産業省：「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」2015. 一部改正。
https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/sanshou_kangaekata.pdf
- 2) 教育職員養成審議会第3次答申 1999.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/1315385.htm
- 3) 文部省：「教育改革プログラム」1997.
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad_199701/hpad_199701_2_066.html
- 4) 斎藤剛史：「正式採用前に辞める新採教員が増加……文部科学省の調査」（「ベネッセ教育情報サイト」2007.）.
<http://benesse.jp/kyouiku/200710/20071004-2.html>
- 5) 中央教育審議会：「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（答申）2012.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_0/toushin/1325092.htm
- 6) 中央教育審議会：「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（答申）2015.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf
- 7) 畑克明・森本直人：教育体験活動：（「1000時間体験学修」）の概要，島根大学教育学部附属教育支援センター教育臨床総合研究紀要4，pp1-12，2005.
- 8) 谷川至孝：教員養成の一環としてのインターンシップー仏教大学の事例を参考としてー，仏教大学総合研究所紀要第16号，pp53-69，2009.
- 9) 酒井研作：教職志望学生による学校インターンシップ事業の実態と課題 日比山大学短期大学部教職課程研究2，pp55-62，2016.
- 10) 村上祐介・八木利律子・山本弥栄子：学校インターンシップの学びが大学生のキャリア意識と適応感に及ぼす影響，プール学院大学研究紀要(58)，pp153-168，2017.
- 11) 白瀬浩司・清田雄二：小学校インターンシップの試み(1)，九州女子大学紀要，第53巻1号，pp123-135，2016.
- 12) 芦屋大学『平成30年度自己点検評価書』2019.
- 13) (代)山本礼二：学校インターンシップカリキュラム開発プロジェクト（JPSS 科研費助成），目白大学，2018.

